第３章　地域や職業による生活復興感の規定因の違い

１．地域による違い

１）地域による生活復興感の違い

灘区、兵庫区、中央区でくらす人々の生活復興感は低い(図１)
家屋被害程度が高かった長田区の生活復興感は、低くない(図２)

地域によって、生活復興感にどのような差があるかを見てみると、灘区、兵庫区、中央区で暮らす人々の生活復興感が顕著に低い結果となった。つまり灘区、兵庫区、中央区で暮らす人々の多くが、生活に満足感を持って、日々の生活を現在おくることができないでいるということが考えられる。このような差が現われた理由として、震災で受けた被害の大きさが考えられる。そこで震災による家屋被害程度と地域の関連を見てみると、全壊全焼家屋の多い順に、①長田区②灘区③芦屋市④東灘区⑤中央区、となっており、全壊全焼と半壊半焼家屋をあわせてみると、多い順に①長田区②灘区③芦屋市④兵庫区⑤東灘区、となっていることがわかった。地域における家屋被害程度の高さが生活復興感の低さに影響を与えているとすると、灘区、兵庫区、中央区の生活復興感の低さは説明がつく。

被害程度の高いものに注目すると、芦屋市、東灘区の家屋被害程度が高かった。東灘区は、灘区、兵庫区、中央区についで生活復興感が低い結果となっている。ところが芦屋市の生活復興感は比較的高い値をとっている。そして、全壊全焼のみ、また全壊全焼と半壊半焼家屋をあわせた両順位で、最も被害程度が高かった長田区の生活復興感が低くないのはなぜなのか。

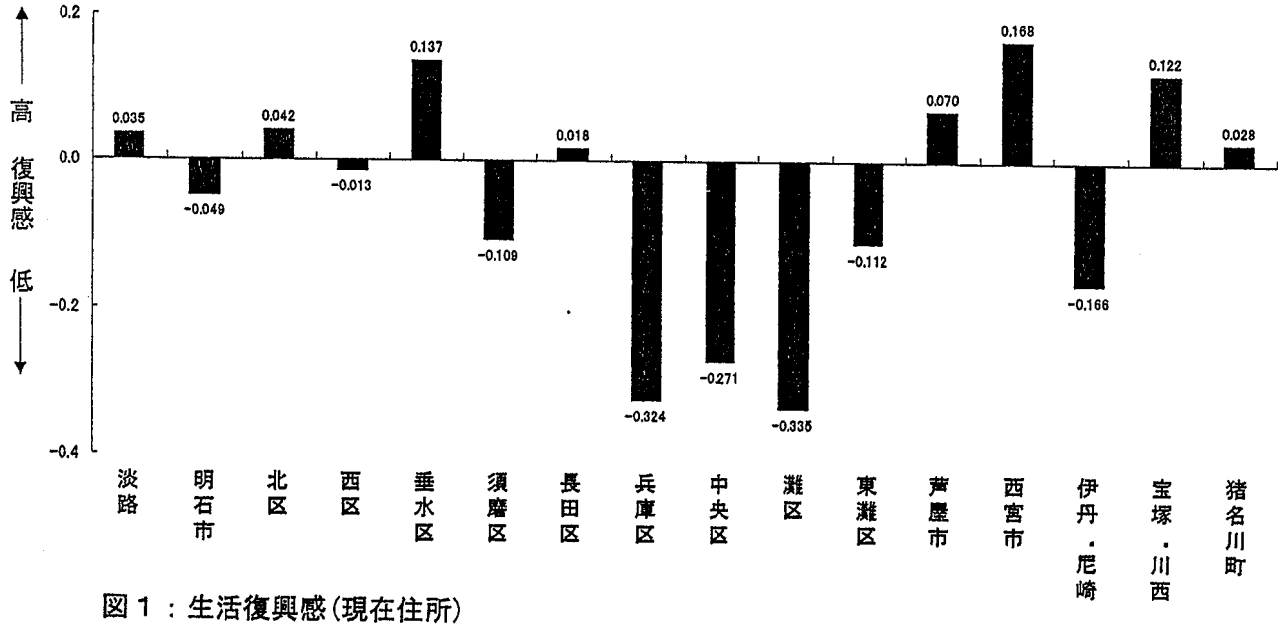

図１：生活復興感(現在住所)

中央値を０とした生活復興感得点の平均値

得点が高くなればなるほど、現在の生活に対する満足度(生活復興感)が高い

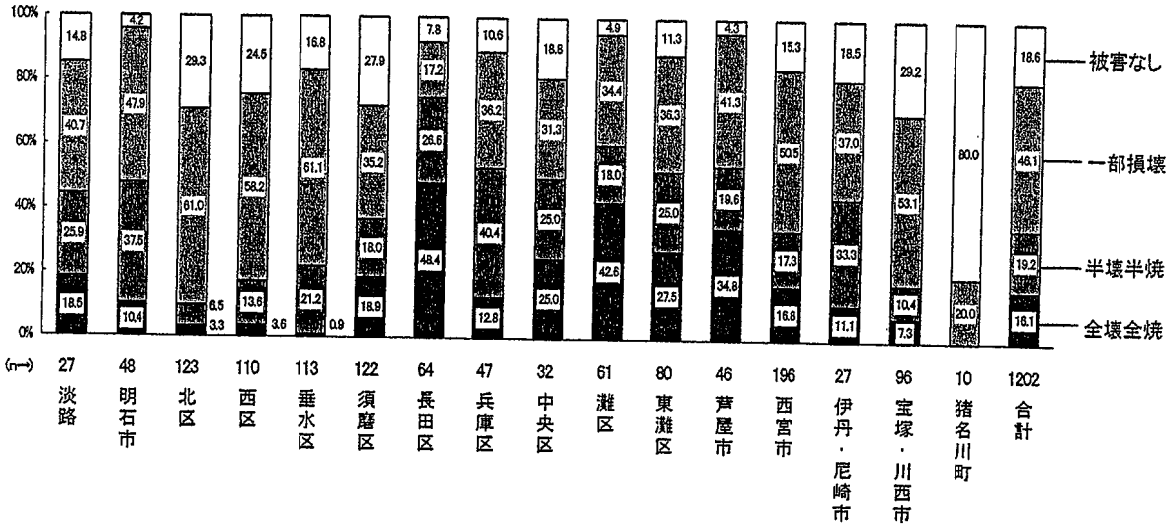

図２：家屋被害(現在住所)

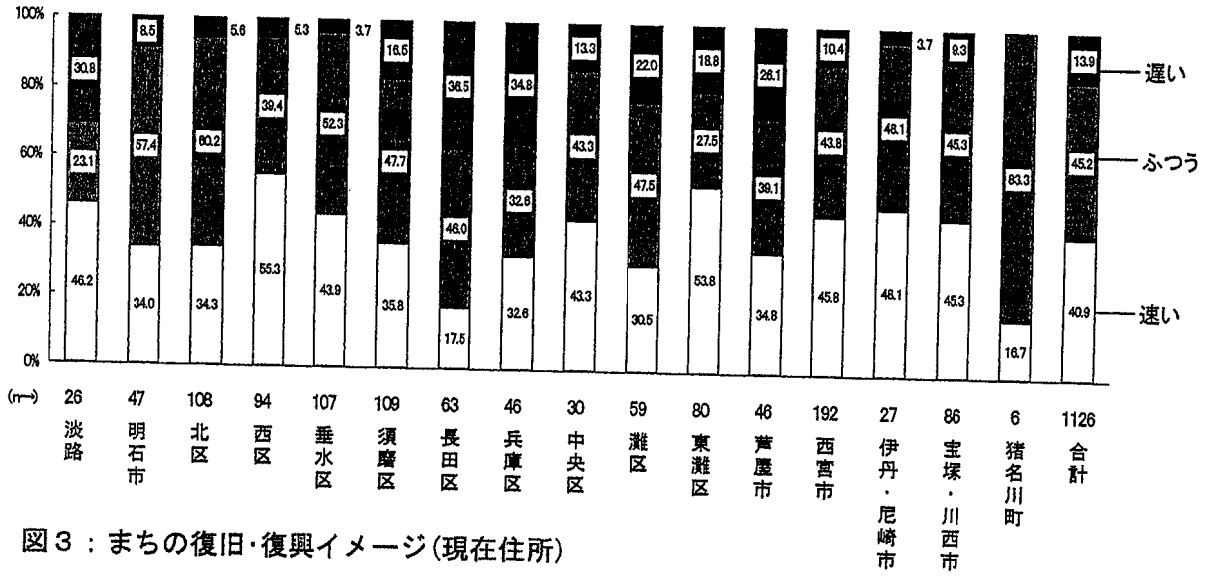

図３：まちの復旧・復興イメージ(現在住所)

長田区にくらす人々は地域の復旧・復興は進んでいないと感じている(図 3)
家屋被害程度、生活復興感において目立った特徴のない淡路にくらす人々が、地域の復旧・復興は進んでいないと感じている(図 4)

ここで、前項の疑問を考察するために、地域にくらす人々が、まちの復旧・復興の速度を速いと感じているか遅いと感じているかを地域別に示した。その結果、まちの復旧・復興は遅いと感じている人が多い地域順に、①長田区②兵庫区③淡路④芦屋市⑤灘区⑥東灘区、であった。また地域の夜の明るさが、震災前より明るくなった、暗くなった、前の状態に戻ったと感じているかを地域別に示した。その結果、夜の地域の明るさは、震災前より暗いと感じている人が多い地域順に、①長田区②兵庫区③淡路④中央区⑤東灘区⑥灘区、であった。ここでいえることは二つである。まず、長田区は、実際に震災によって受けた家屋被害程度が高く、そしてそこにくらす人々は、まちの復旧・復興、地域の夜の明るさにおいて、長田区の復興はすすんでいないと考えているのにもかかわらず、生活復興感は、低くはない。また、家屋被害程度では上位５位に入っていない淡路において、人々の実感する地域の復旧・復興はすすんでいない。

震災時の被害程度だけでは、説明することができない要因が地域には存在すると考えられる

前述のように震災時の家屋被害程度だけでは、人々の生活復興感、人々の感じる地域の復旧・復興は説明がつかない。そこで、以降は、さまざまな要因と地域との関連を明らかにしていく。

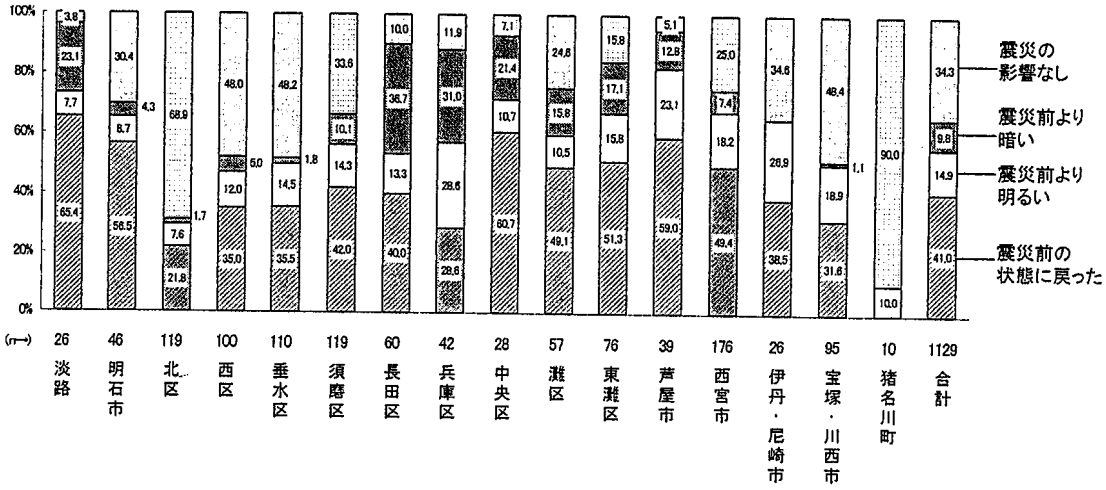

図４：地域の夜の明るさ(現在住所)

２）地域差とさまざまな要因との関連

Ａ．世代

西宮市、西区は 20・30 代が多い(図 5)
猪名川町、芦屋市は 40・50 代が多い
淡路、須磨区は、60 代以上が多い

20・30 代は西宮市（26.5%）、西区（27.3%）で多かった。40・50 代は猪名川町（60.0%）芦屋市（52.2%）、60 代以上は淡路（51.9%）、須磨区（50.0%）で多かった。

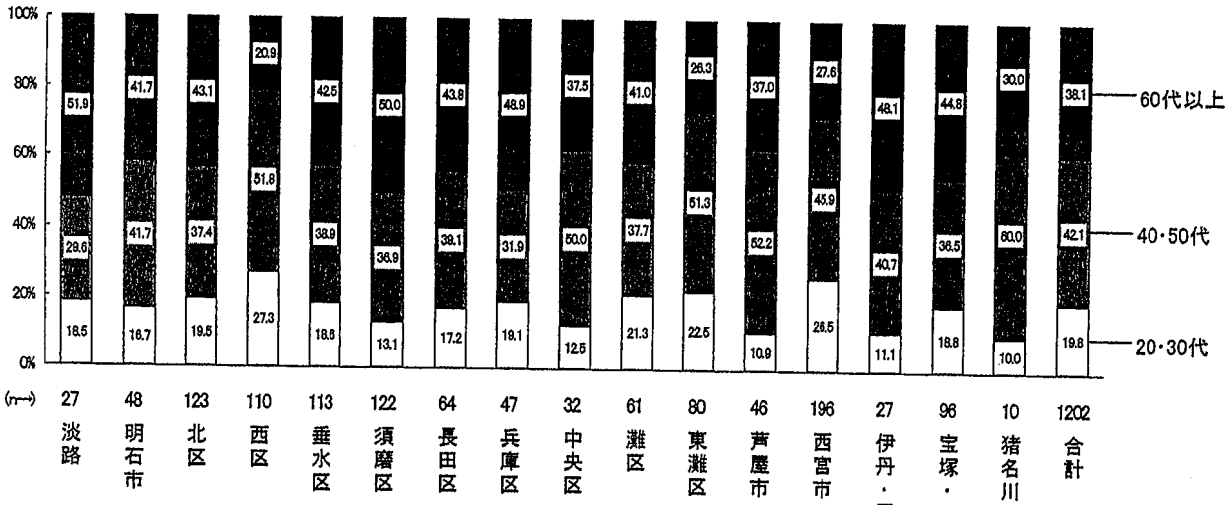

図５：世代(現在住所)

B．現在の住居形態

中央区・兵庫区は、民間賃貸住宅にくらす人の割合が高い(図 6)(図 7)
須磨区、芦屋市、長田区、灘区は、民賃以外の借家にくらす人の割合が高い
猪名川町、西区、淡路、北区は、持家にくらす人の割合が高い
芦屋市、中央区は、社宅にくらす割合が高い

現在の住居形態と地域との関連をみると、まず特徴的なのは、中央区、兵庫区は民間賃貸住宅にくらす割合が、他の地域に比べて際立って高いことである。民間賃貸集合住宅以外の借家（借家、借地持家、公営、公団・公社）率が高いのは、須磨区、芦屋市、長田区、灘区であった。その内訳を見ると、借地持家が多いのが長田区（12.5%）、公営住宅が多いのが、須磨区（15.6%）、芦屋市（13.0%）、東灘区（12.5%）、公団・公社が多いのが、北区（7.4%）、西宮市（6.6%）、芦屋市（6.5%）借家が多いのが、淡路（7.4%）だった。持家（持地持家、分譲集合住宅）率が大きいのは、猪名川町（100.0%）、西区（85.5%）、淡路（85.2%）、北区（84.0%）であった。社宅の多いのは、芦屋市（6.5%）、中央区（6.3%）であった。

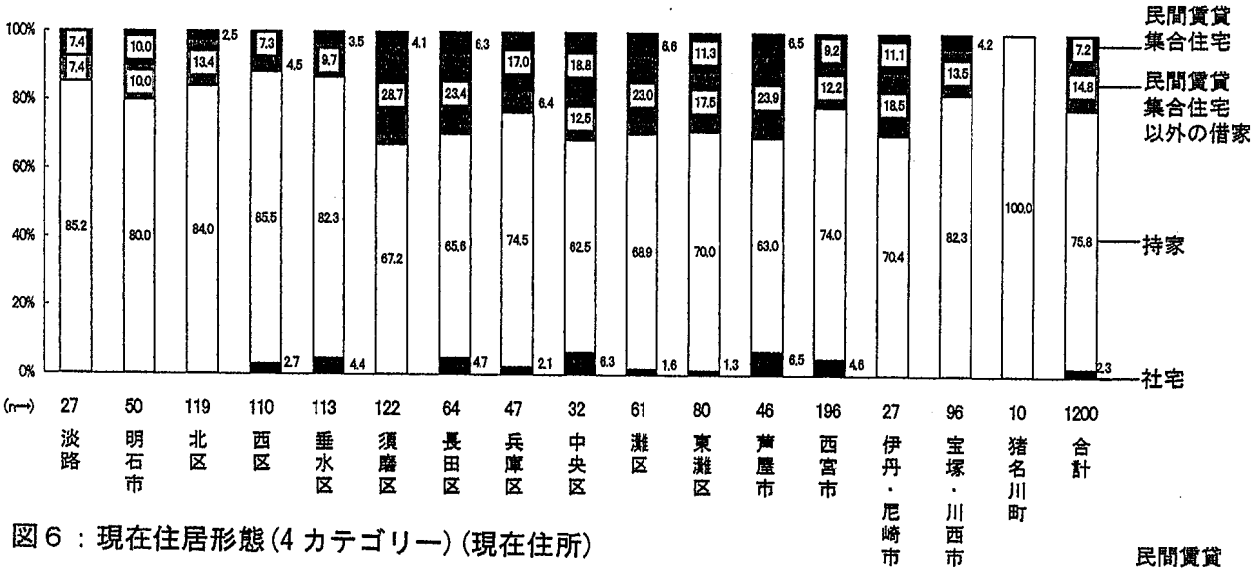

図６：現在住居形態(4 カテゴリー)(現在住所)

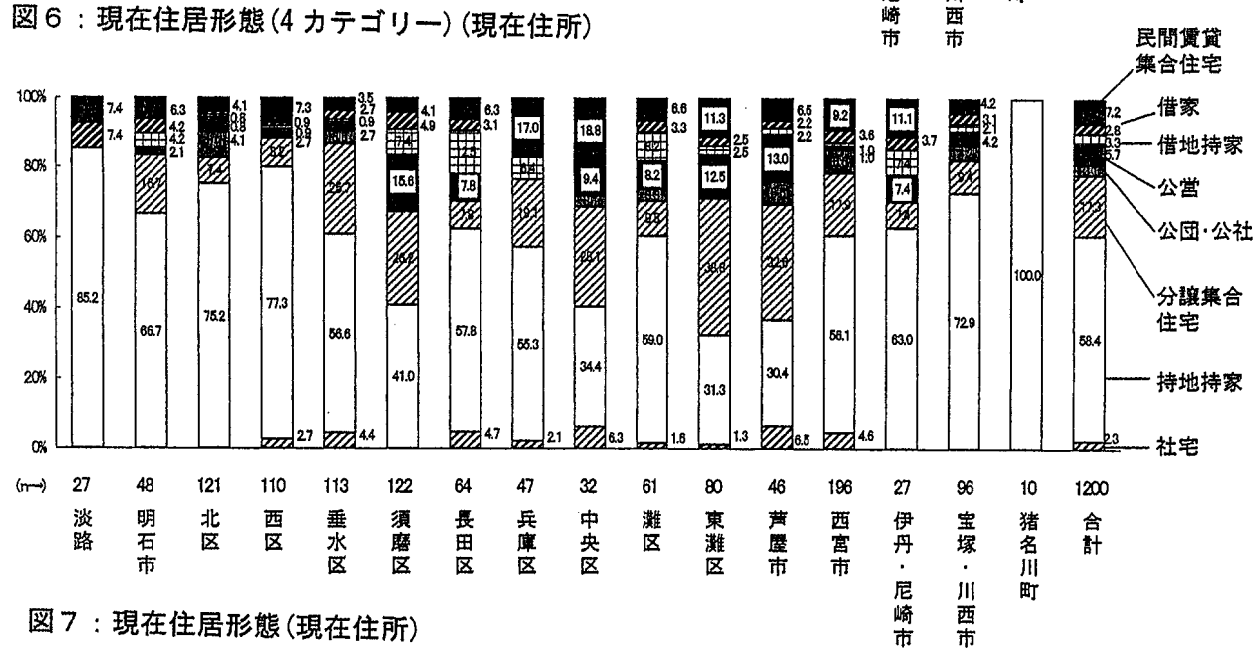

図７：現在住居形態(現在住所)

C．まちへの愛着

猪名川町、淡路、宝塚・川西市は、まちへの愛着が高い(図 8)
兵庫区、長田区、中央区、灘区の人の、まちへの愛着は低い人が多い

まちへの愛着が高いのは、猪名川町、淡路、宝塚・川西市であった。まちへの愛着が低い人が多かったのが、兵庫区、長田区、中央区、灘区であった。

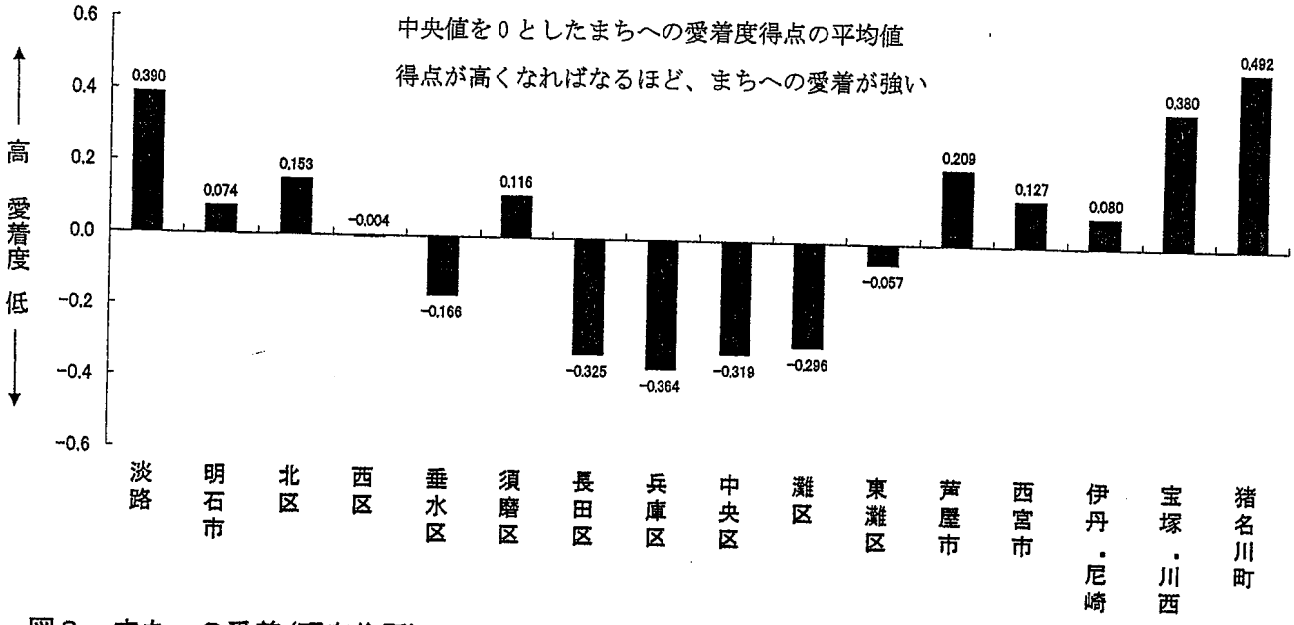

図８：まちへの愛着(現在住所)

D．家計

中央区、淡路、兵庫区、長田区は、家計が赤字の人が多い(図 9)
猪名川町、宝塚・川西市、垂水区は、家計の収支バランスがとれている人が多い

赤字が多かったのは、中央区（87.5%）淡路（85.0%）、兵庫区（85.7%）、長田区（78.0%）であった。家計の収支バランスがとれている（トントン、黒字）人が多かった地域は、猪名川町（71.4%）、宝塚・川西市（43.1%）、垂水区（41.4%）であった。

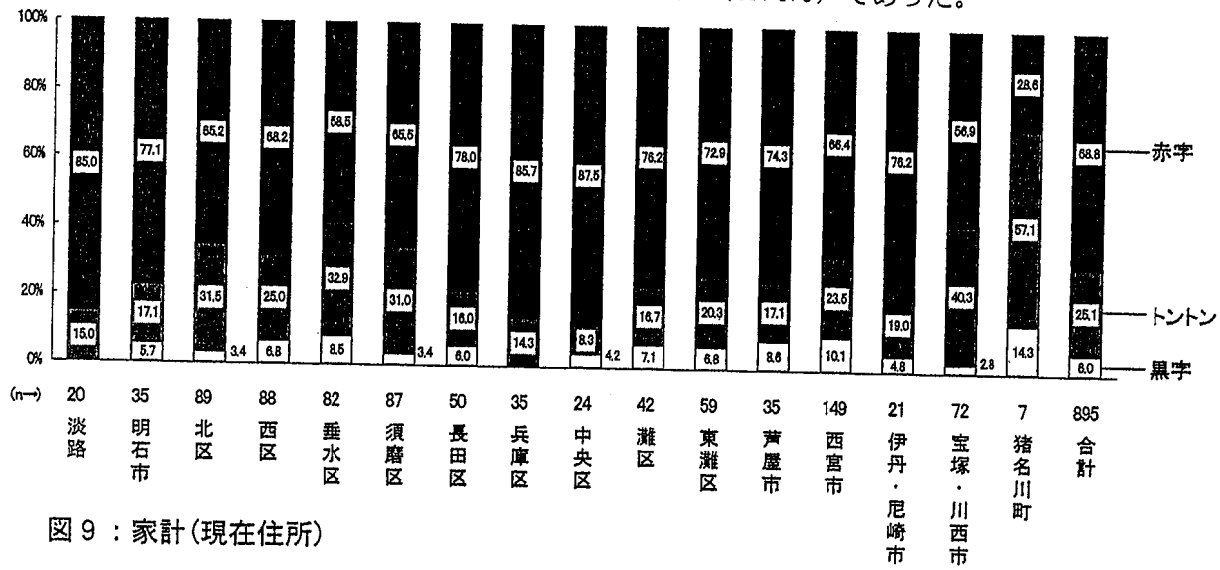

図９：家計(現在住所)

E．震災後の職業の変化

灘区、中央区は、震災が原因で転退職をした人の割合が高い(図 10)

震災が原因で、転退職をした人の割合が高かったのは、灘区（14.8%）、中央区（12.5%）であった。震災が原因でなく、転退職した人の割合が高かったのは、灘区（14.8%）、宝塚・川西市（13.5%）、芦屋市（13.0%）であった。転退職後無職（現在 60 才以上）の人の割合が高かったのは、伊丹・尼崎市（18.5%）、淡路（14.8%）、宝塚・川西市（14.6%）、明石市（12.5%）であった。

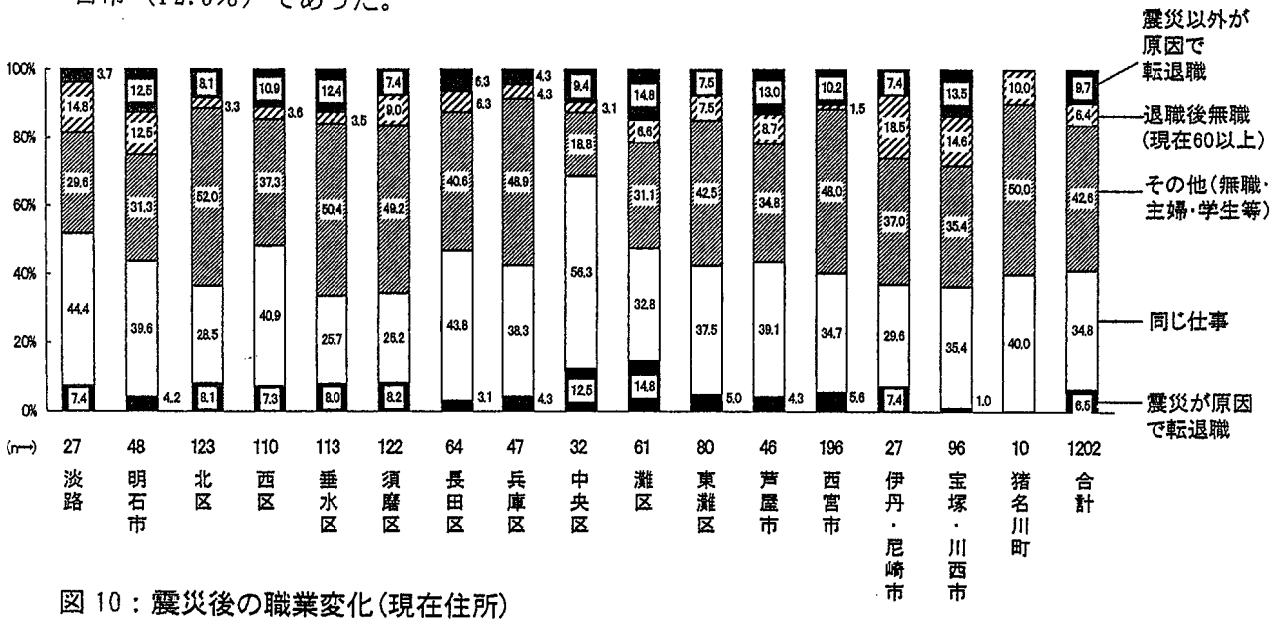

図 10：震災後の職業変化(現在住所)

F．市民性

人の和も自分自身も大事にする和己共存のグループに属する人が多いのは、芦屋市（33.3%）、北区（31.4%）、中央区（31.3%）であった。人の和よりも自分自身を優先する傾向の人が多かったのは、猪名川町（40.4%）、伊丹・尼崎市（38.5%）、灘区（32.8%）だった。人の和も自分自身も大切にしない傾向の人が多かったのは、東灘区（33.8%）、明石市（25.0%）、垂水区（24.8%）であった。自分自身よりも人の和を重んじる傾向の人が多かったのは、淡路（48.1%）、須磨区（38.5%）、垂水区（36.3%）であった(図 11)。

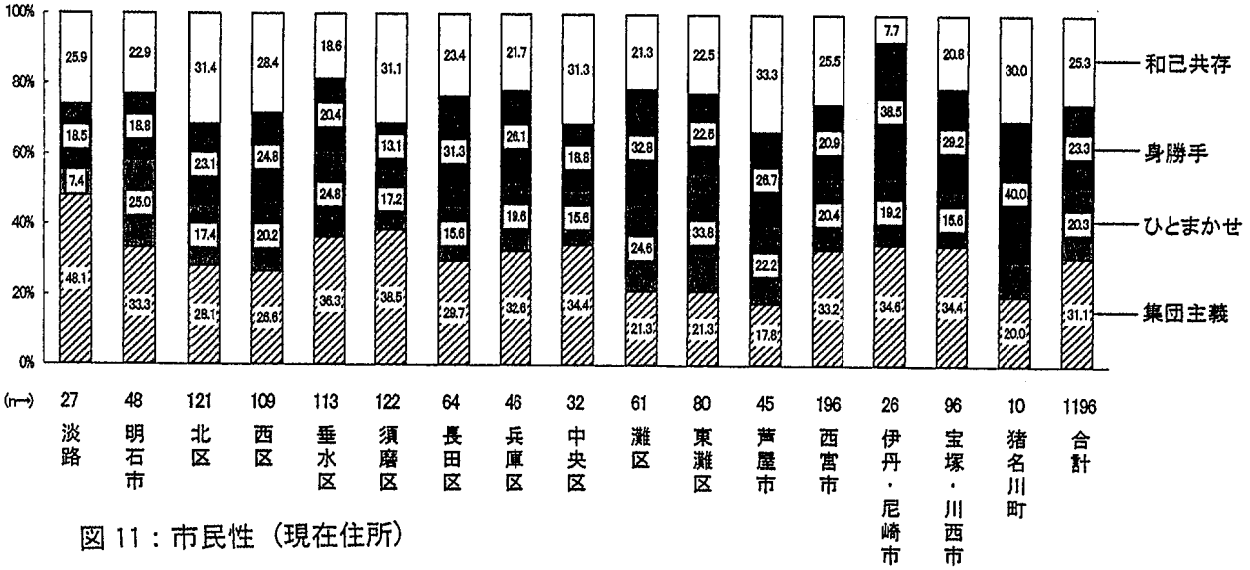

図 11：市民性（現在住所）

G．南海・東南海の被害予測

中央区、淡路、伊丹・尼崎、明石市は、将来の災害の被害程度を高くなると予測している人が多い(図 12)

猪名川町、西区、灘区、北区は、将来の災害の被害程度を低いものになると予測している人が多い

南海・東南海の被害予測を被害程度は高くなると予測したのは、中央区、淡路、伊丹・尼崎、明石市だった。南海・東南海の被害予測を被害程度は低くなると予測したのは、猪名川町、西区、灘区、北区だった。

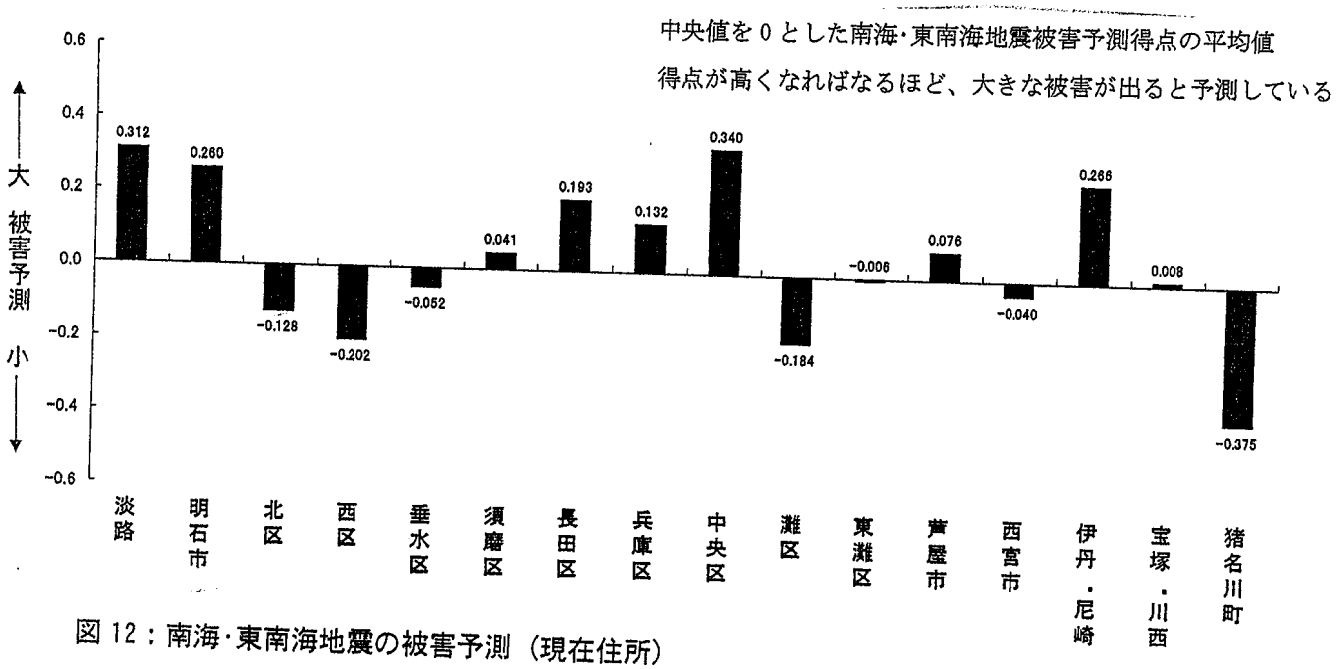

図 12：南海･東南海地震の被害予測（現在住所）

H．市民と行政との新しいかかわり

淡路は、公共的な事柄には積極的に市民がかかわるべきと考える人が全体の７割を占める(図 13)

芦屋市は、市民が自由に自分の考えでふるまってよいと考える人が多い反面、行政の後見が不可欠と考える人も多い

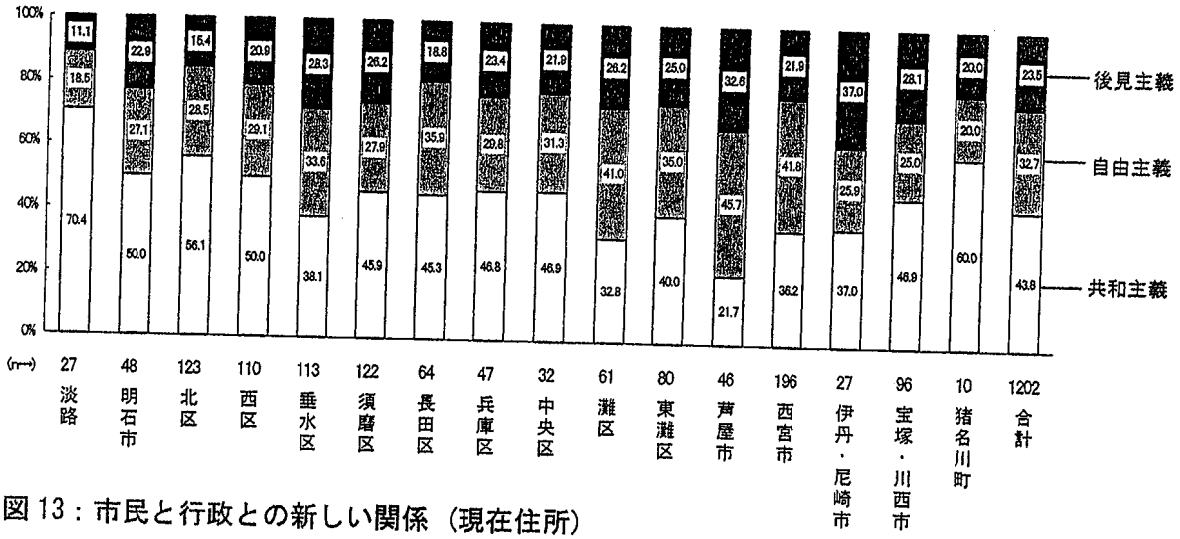

図 13：市民と行政との新しい関係（現在住所）

公共的な事柄には積極的に市民がかかわるべきと考える、共和主義的考え方の人が多かったのは、淡路（70.4％）、猪名川町（60.0％）、北区（56.1％）であった。自分の考えに従って自由にふるまってよいと考える、自由主義的考え方の人が多かったのは、芦屋市（45.7％）、西宮市（41.8％）、灘区（41.0％）であった。行政の後見が不可欠と考える後見主義的考えの人が多かったのは、伊丹・尼崎市（37.0％）、芦屋市（32.6％）であった。特徴的で興味深かったのは、全体の７割が共和主義的考えをもつ淡路、自由主義的考えの人が多い一方で後見主義的考えの人も多い芦屋市であった。

2．職業による違い

1）職業による生活復興感の違い

商工自営業者、無職（59才以下）、サービス関連従事者、産業労働者の生活復興感は低い（図1）

農林漁業、学生、事務・営業職、管理職の生活復興感は高い

職業によって、生活復興感にどんな差があるか見てみると、商工自営業者、59才以下の無職、サービス関連従事者、産業労働者の生活復興感が低いことがわかった。また、農林漁業、学生、事務・営業職、管理職の生活復興感が高いことがわかった。つまり現在ついている職種によって、日々の生活に対する満足度に差があることが明らかになった。

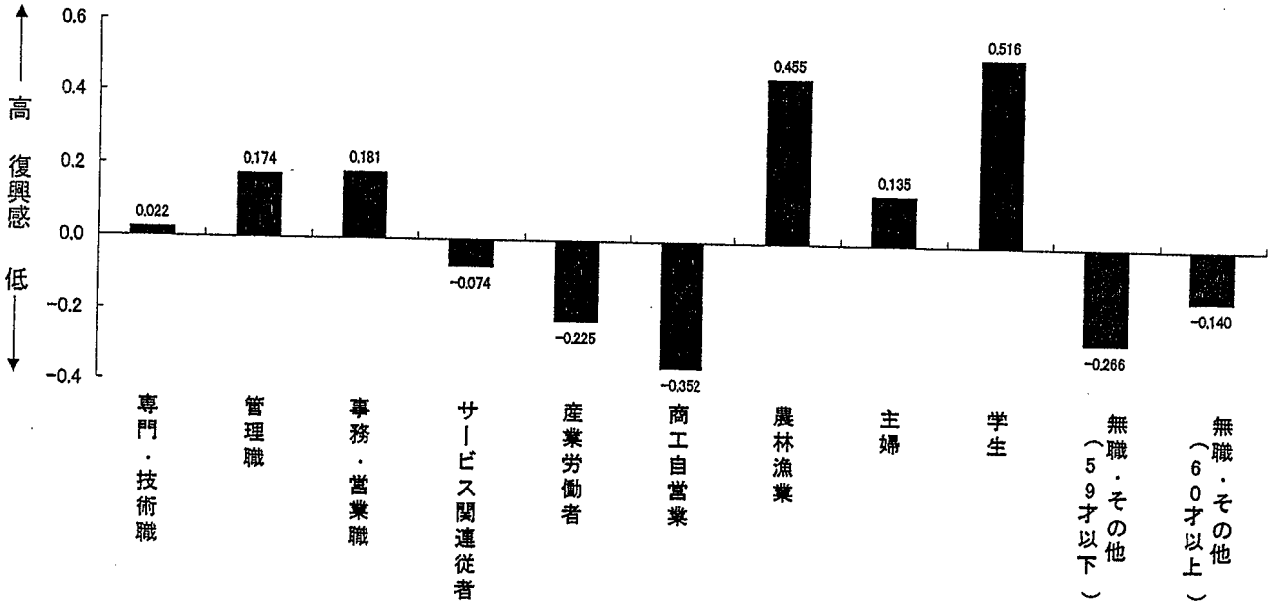

図1：生活復興感（現在職業）　中央値を0とした生活復興感得点の平均値

得点が高くなればなるほど、現在の生活に対する満足度（生活復興感）が高い

サービス関連従事者、商工自営業者、産業労働者、農林漁業の人は、地域の夜の明るさに対して、震災の影響があったと考えている（図2）

農林漁業、産業労働者は、現在の地域の夜の明るさを肯定的に評価している人が多い

商工自営業者、サービス関連従事者は、現在の地域の夜の明るさを否定的に評価している人が多い

実際に職業ごとに、地域の夜の明るさを通して、まちの復旧・復興に対してどのような考えをもっているかを調べた。結果は、サービス関連従事者、商工自営業者、産業労働者、農林漁業において顕著な差が見られた。まず4つに共通していえることは、震災の影響はなかったと答えた人が他の職業より少なかった。つまりこの4職業に就いている人たちは、何らかの震災の影響があったと考える人が多いことが明らかになった。次に農林漁業、産業労働においては、震災前に戻った、震災前より明るくなったと地域の夜の明るさを肯定的に評価している人が多かった。商工自営業者、サービス関連従事者においては、震災前より暗くなったと評価している人が多かった。この結果は、前項の生活復興感の結果と比べると、①サービス関連従事者の生活復興感の低さ、②学生、事務・営業職、管理職の生活復興感の高さ、には職業以外の要因も強く影響していることが考えられる。

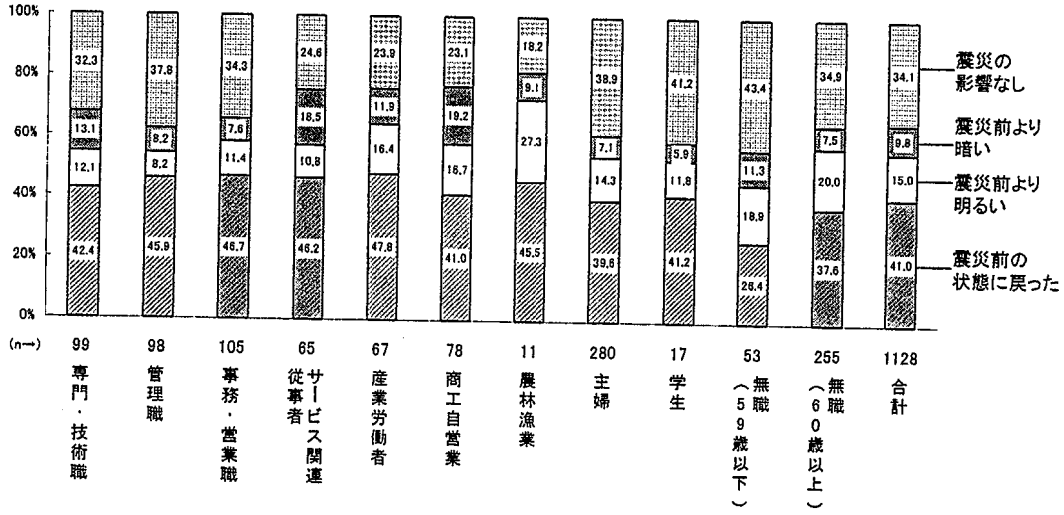

図２：地域の夜の明るさ(現在職業)

２）職業の違いとさまざまな要因との関連

Ａ．性別・世代

産業労働者、管理職、農林漁業、商工自営業は男性が多い(図 3)
産業労働者、管理職、主婦は、40・50 代が多い(図 4)
農林漁業、商工自営業は、60 代が多い

性別と職業との関連を見ると、男性が多い職業は、産業労働者(91.8%)、管理職(91.7%)、農林漁業（90.9%）、商工自営業（65.4%）であった。女性が多いのは、主婦（100%）、無職(60.3%)、であった。世代で見ると、20・30 代に多いのは、学生（100%）、無職（44.8%）、

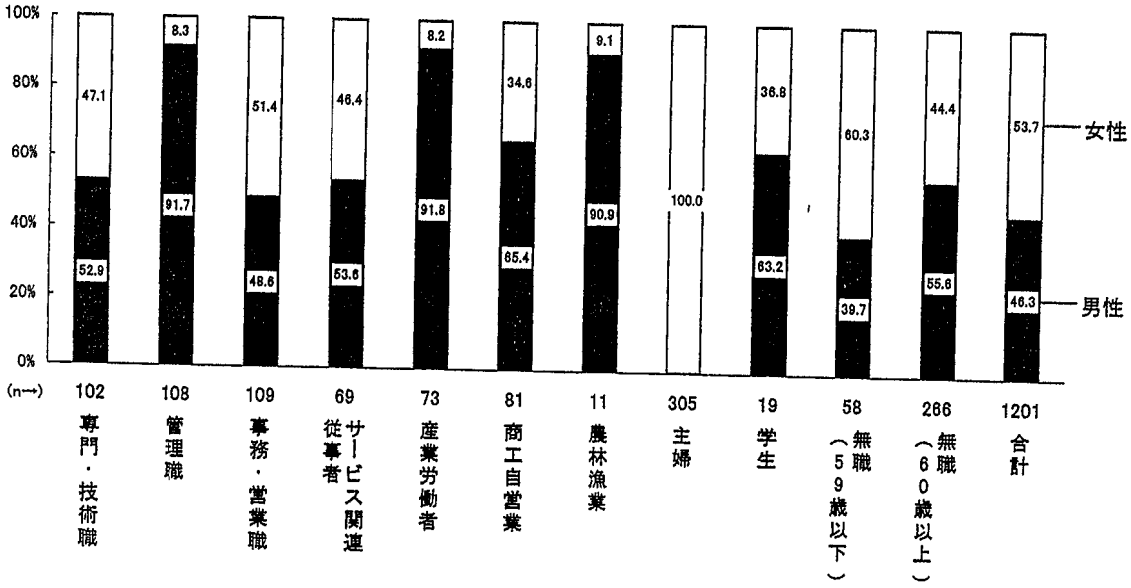

図３：性別(現在職業)

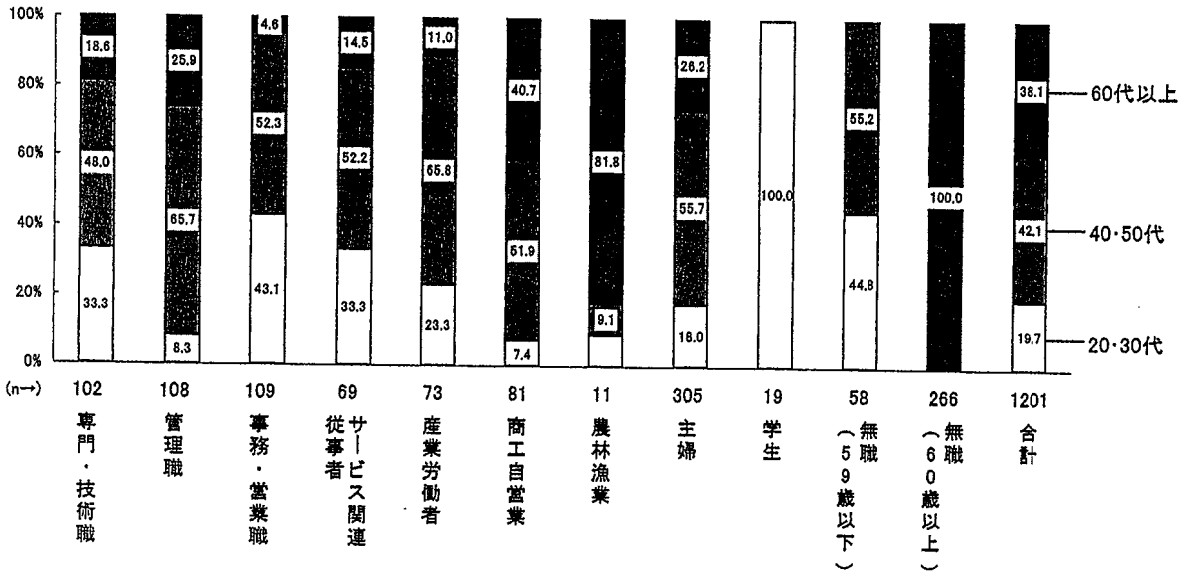

図４：世代(現在職業)

事務・営業職（43.1%）、サービス関連従事者（33.3%）、専門・技術職（33.3%）、40・50代に多いのは、産業労働者(65.8%),管理職（65.7%）、主婦（55.7%）、60 代に多いのは、無職（100%）、農林漁業（81.8%）、商工自営業（40.7%）であった。

B．現在の住居形態

サービス関連従事者、産業労働者、専門・技術職は、民間賃貸住宅にくらす人の割合が高い(図 5)(図 6)
サービス関連従事者、産業労働者、無職は、民賃以外の借家にくらす人の割合が高い
農林漁業、学生、管理職は、持家にくらす人の割合が高い
事務・営業職は、社宅にくらす人の割合が高い

現在の住居形態と職業との関連をみると、まず特徴的なのは、サービス関連従事者（15.9%）、産業労働者（11.0%）、専門・技術職（10.8%）は民間賃貸住宅にくらす割合が、他の職業に比べて高いことである。民間賃貸集合住宅以外の借家（借家、借地持家、公営、公団・公社）率が高いのは、産業労働者、サービス関連従事者、59 才以下・60 才以上の無職であった。その内訳を見ると、借地持家が多いのが 59 才以下の無職（6.9%）、公営住宅が多いのが、サービス関連従事者（13.0%）、産業労働者（11.0%）、公団・公社が多いのが、産業労働者(6.8%)、借家が多いのが、学生(5.3%)、サービス関連従事者(4.3%)だった。持家(持地持家、分譲集合住宅)率が大きいのは、農林漁業(90.9%)、学生(89.5%)、管理職（86.9%）であった。社宅が多いのは、事務・営業職（9.2%）であった。

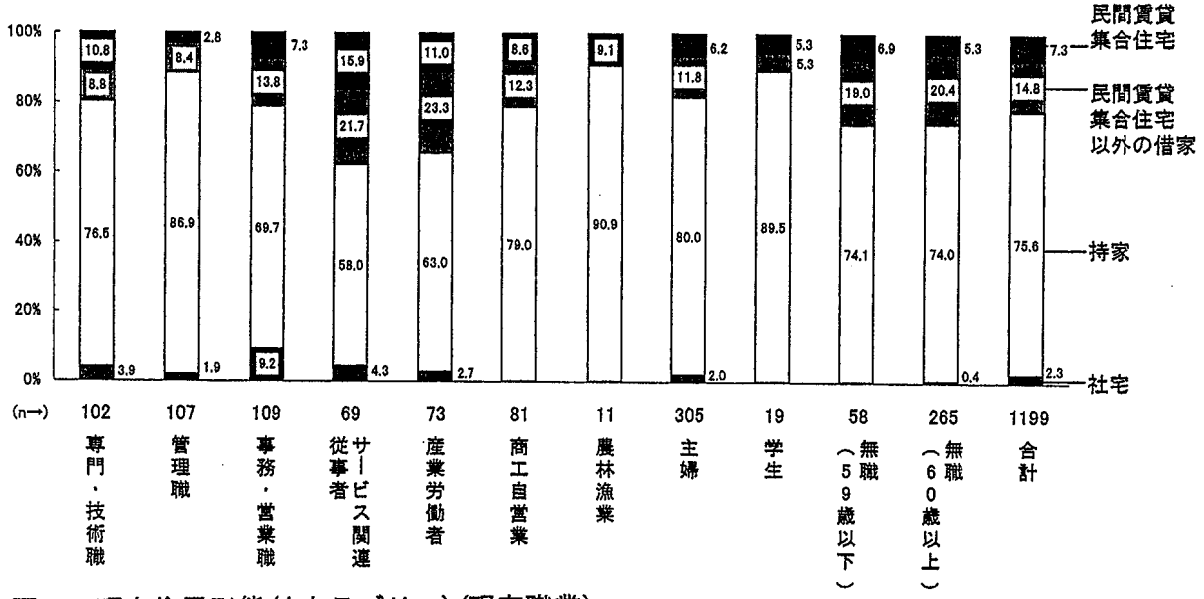

図５：現在住居形態(4カテゴリー)(現在職業)

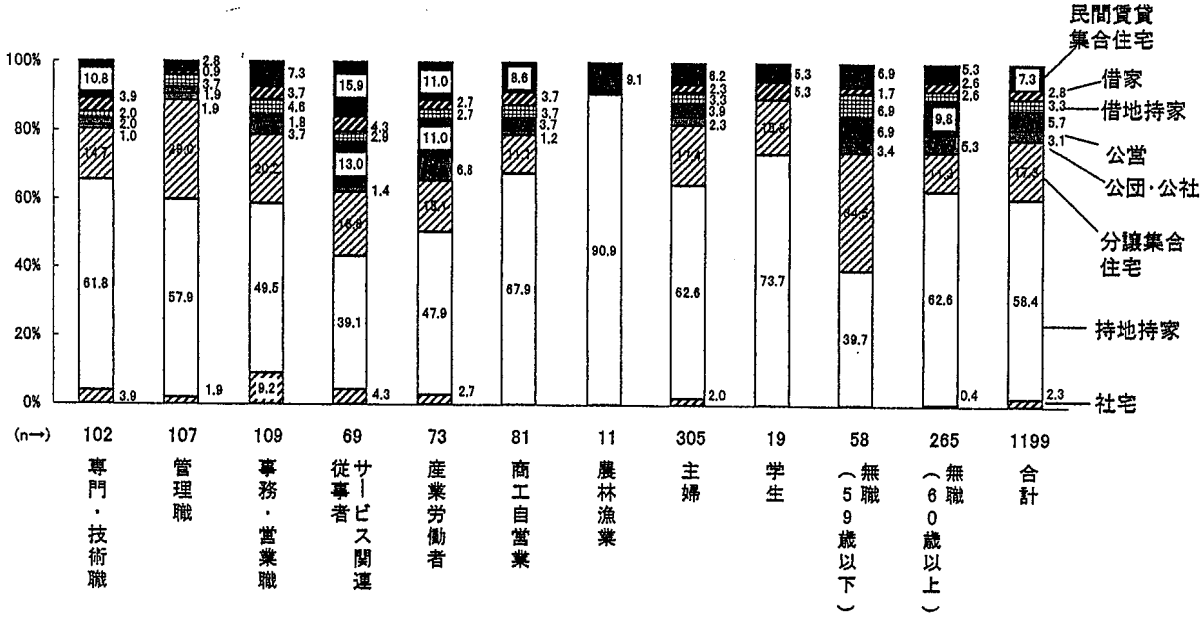

図６：現在住居形態(現在職業)

C．まちへの愛着

農林漁業は、まちへの愛着が非常に高い(図7)
主婦、60才以上の無職のまちへの愛着は、比較的高い
59才以下の無職、サービス関連従事者、産業労働者、専門・技術職、商工自営業のまちへの愛着は、低い人が多い

職業別のまちへの愛着度を見てみると、農林漁業のまちへの愛着度が飛びぬけて高く、次いで主婦、60才以上の無職であった。まちへの愛着が低い人が多かったのは、59才以下の無職、サービス関連従事者、産業労働者、商工自営業であった。

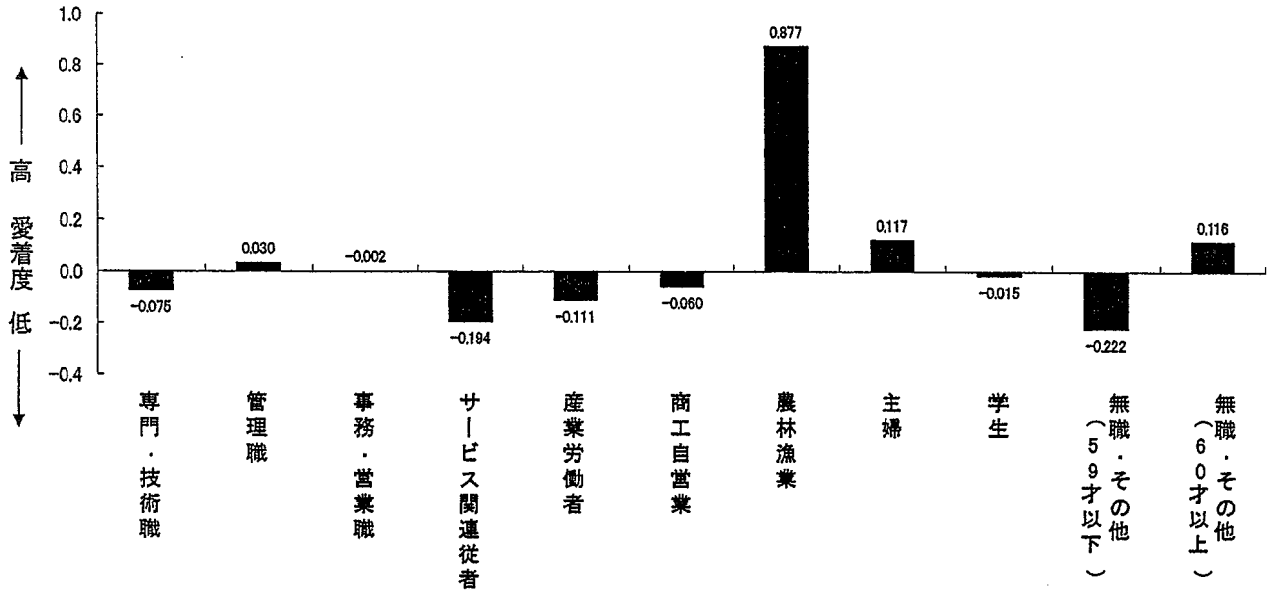

図７：まちへの愛着(現在職業)

中央値を０としたまちへの愛着度得点の平均値
得点が高くなればなるほど、まちへの愛着が強い

D．家計

農林漁業、商工自営業、産業労働者、サービス関連従事者は、家計のバランスが赤字の人が多い(図 8)

事務・営業職、学生、管理職は、家計の収支のバランスがうまくいっている人が多い

家計のバランスについて見ると、農林漁業（85.7%）、商工自営業（85.0%）、産業労働者（84.5%）、サービス関連従事者（84.3%）で、赤字であると答えた人の割合が多かった。家計の収支バランスがトントン、黒字を含めて、収支バランスがとれていると答えた人が多かったのは、事務・営業職（48.2%）、学生（47.1%）、管理職（46.4%）であった。

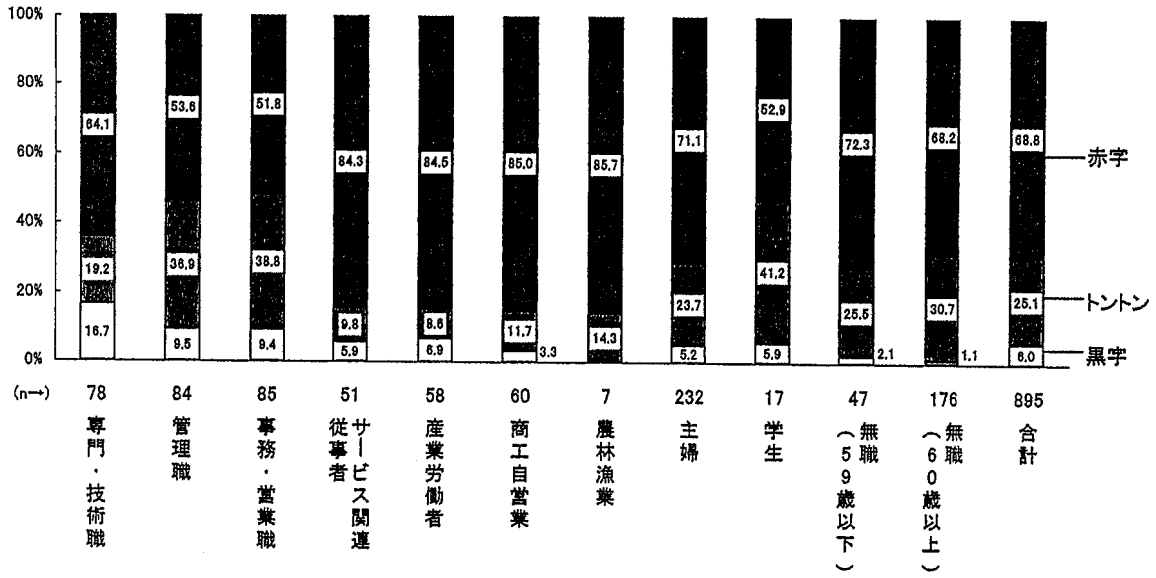

図８：家計(現在職業)

E．近所づきあい

<u>農林漁業、主婦、60 才以上の無職、商工自営業</u>は、近所づきあいが活発である(図 9)（図 10）（図 11）

近所づきあいに関して、各項目に対して１件でもおつきあいがあると答えた人を職業別に見てみると、「この１ヶ月の間にいっしょに買い物や食事などに行ったことがある近所の人がある」と答えた人は、①農林漁業（80.0％）②主婦（46.7％）③60 才以上無職（30.8％）④59 才以下無職（27.6％）⑤商工自営業（27.2％）の順で多かった。「おすそわけしたり、おみやげをもらったりする家がある」と答えた人は、①農林漁業（100％）②主婦（82.2％）③60 才以上無職（81.0％）④管理職（80.6％）⑤商工自営業（79.0％）の順で多かった。「遊びに行ったりしたことのある近所の家がある」と答えた人は、①農林漁業（90.0％）②主婦（68.1％）③商工自営業（48.1％）④サービス関連従事者（47.8％）⑤60 才以上の無職（46.0％）であった。どの設問においても、近所づきあいが活発だったのは、農林漁業、主婦、60 才以上の無職、商工自営業だった。逆にどの設問においても、近所づきあいが「ない」と答えた人が多かったのは、学生だった。

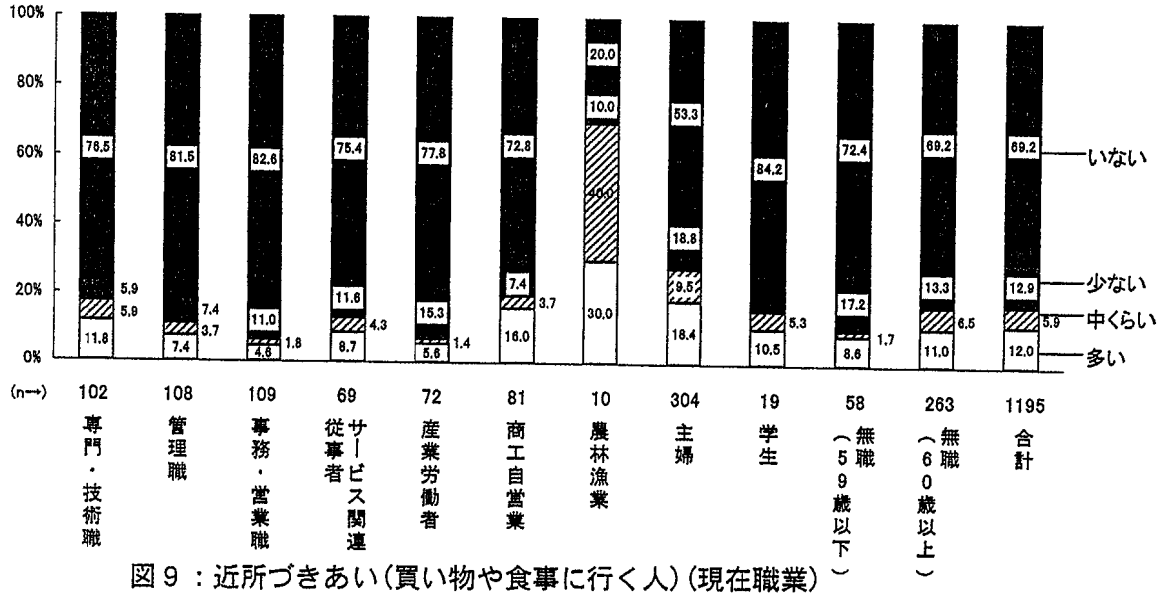

図９：近所づきあい(買い物や食事に行く人)(現在職業)

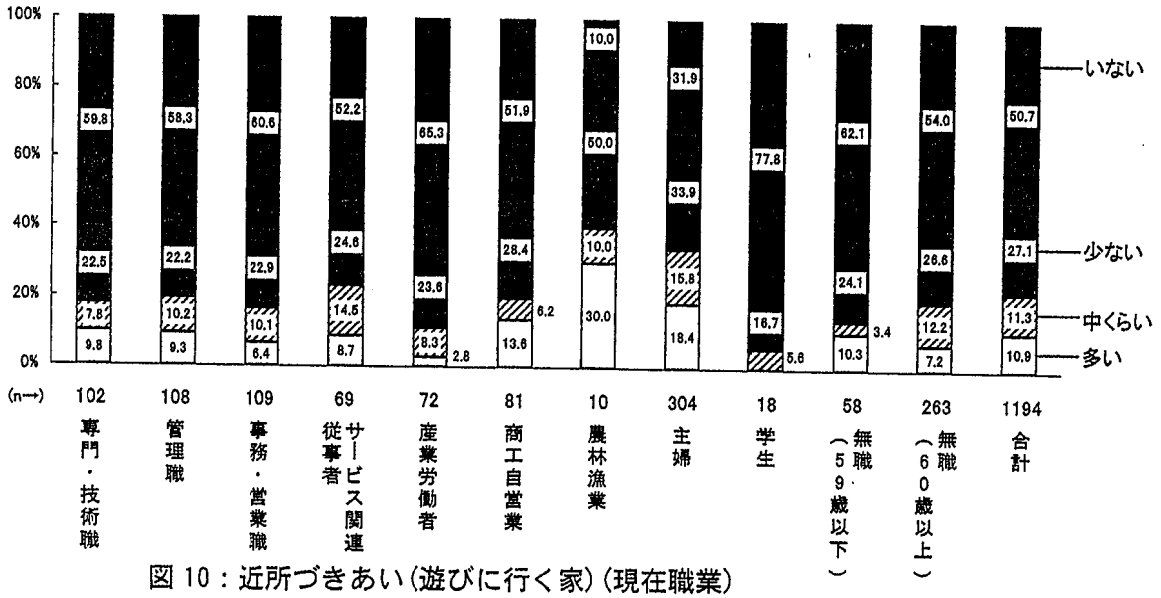

図 10：近所づきあい(遊びに行く家)(現在職業)

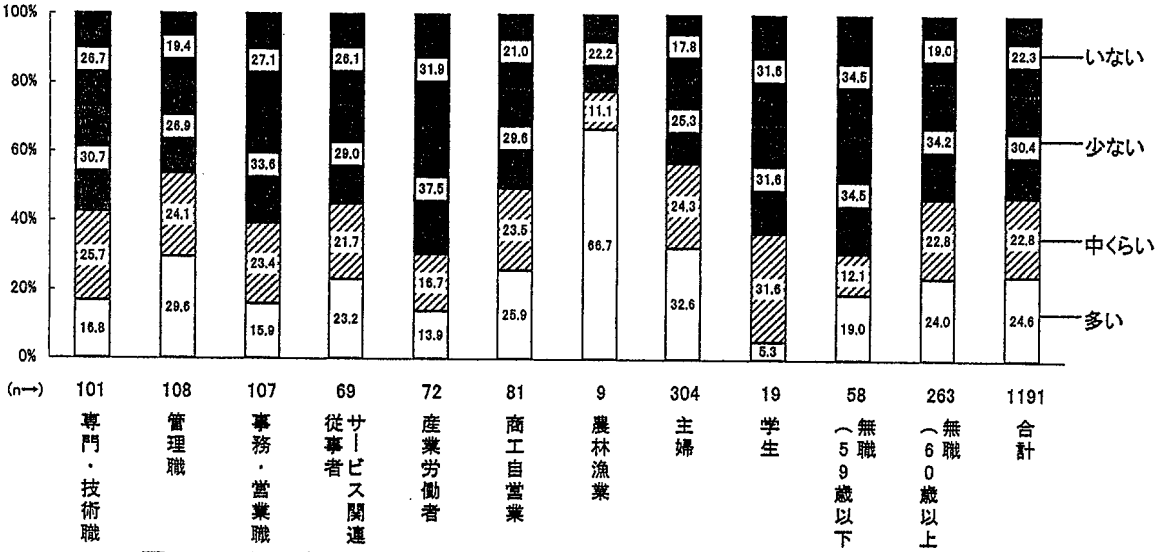

図 11：近所づきあい（おすそわけをする家）（現在職業）

F．市民性

農林漁業（40.0%）は、人の和も自分自身も大事にする傾向の高い人が多かった。学生（44.4%）、サービス関連従事者（36.2%）は、人の和よりも自分自身を大切にする傾向の人が多い。産業労働者（32.9%）、59才以下の無職（31.0%）は、人の和も自分自身も大切にしない傾向の人が多かった。60才以上の無職（42.7%）、商工自営業者（35.8%）は、自分自身よりも人の和を大切にする傾向の人が多かった（図 12）。

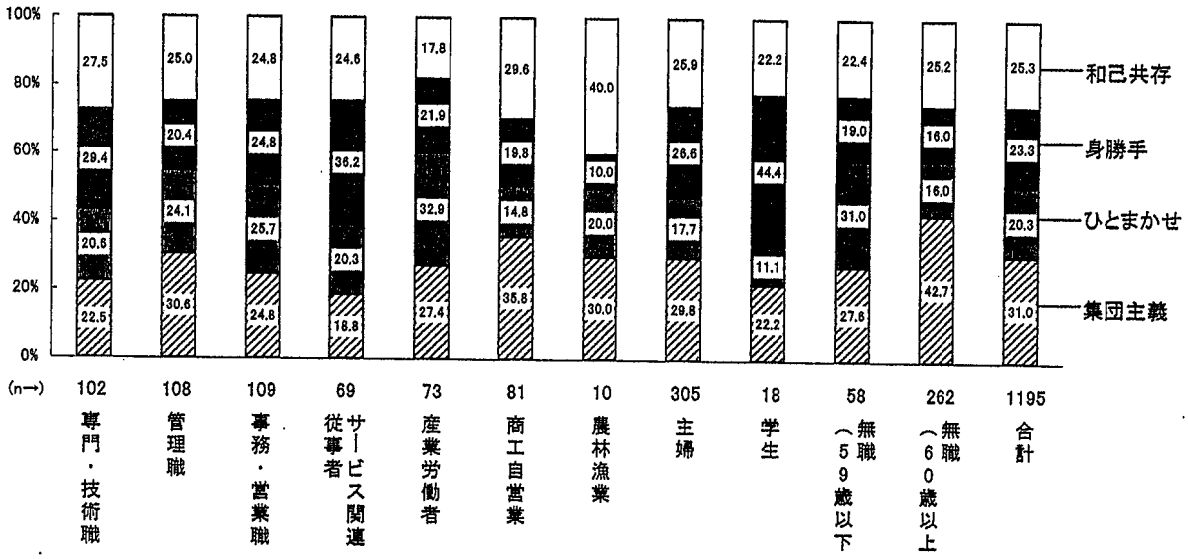

図 12：市民性（現在職業）

G．こころのストレス

農林漁業は、こころのストレスが非常に低い人が多い(図 13)
事務・営業職、管理職、学生、主婦のこころのストレスは、比較的低い
59 才以下の無職、商工自営業、産業労働者、サービス関連従事者のこころのストレスは、高い

農林漁業は、こころのストレスが非常に低かった。ついで、事務・営業職、管理職、学生、主婦のストレスが低かった。こころのストレスが高かったのは、59 才以下の無職、商工自営業、産業労働者、サービス関連従事者だった。

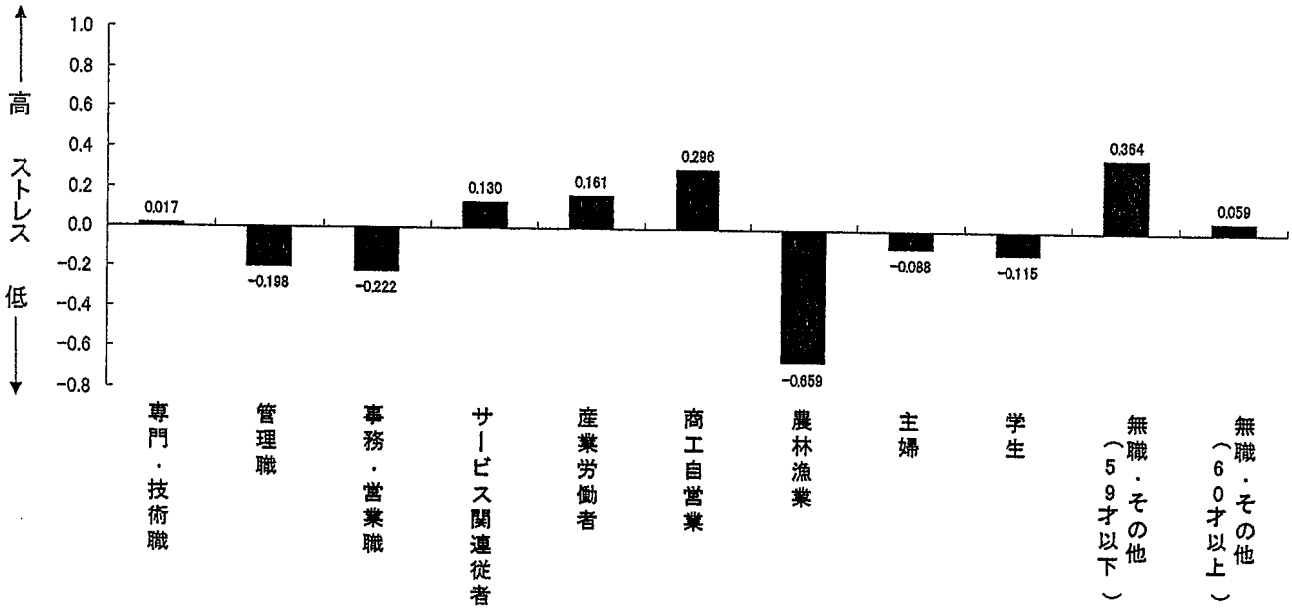

図 13：こころのストレス（現在職業）

中央値を 0 としたこころのストレス度得点の平均値
得点が高くなればなるほど、こころのストレスが高い